

最終報告書

事業名	ミサंगा制作を通じたコミュニティづくりと被災者の自立支援事業				
開始日	2012年3月1日	終了日	2012年5月31日	日数	92日
団体名	気仙沼ボランティアネットワーク聖敬会				
(カウンターパート)					
スタッフ人数	8人				

総額 (税込)	2,910,000 円
---------	-------------

事業目的	<p>仮設住宅で生活する被災者が手芸「ミサंगा制作」を行うことを通して、日々の生活の中に「作業」と「他者とのコミュニケーション」を組み入れ、生活再建の礎を築く。スタッフが作り手を定期的に個別訪問して孤立防止に努めるとともに、定期的な講習会や情報交換の場として作り手たちが集まれる場を提供し、販売を通じて制作意欲を高める機会を設ける。これらの活動を通じ、被災者への就労意欲を高め、また就労に必要な技術的、精神的サポートを行うことにより、被災者（作り手）のより一層の自立を促すことを目的とする。</p>
事業背景	<p>東日本大震災から 11 ヶ月が経過した現在も、新しい仮設住宅での生活の人間関係やコミュニティに馴染む機会が少なく、仮設住宅に住む被災者の孤立化が懸念されている。また、職を失い将来の展望が見えない等の不安の中で精神疾患を起こしたり、震災後遺症の PTSD に悩まされる被災者も存在している。聖敬会は、ミサंगाプロジェクトを通して被災者の見回りや孤立化防止に努めてきており、今後も継続してミサंगा作りを通して孤立化傾向のある被災者宅への訪問を行う必要があると判断している。</p> <p>一方、ミサंगाの作り手間のコミュニティ作りとして、新規作り手対象の説明会や編み方講習開催を実施しているものの、散発的かつ少数人数の作り手が集まる場の提供に留まり、作り手全員が広く顔を合わせる場所や機会が十分でなかった点が課題として残った。現在、約 60 名のミサंगाの作り手は 30 代から 50 代の母親世代が多く、その大半が仮設住宅で生活を送っている。それ故に、作り手はミサंगाという共通項の他に、仮設住宅団地での生活上の困難や悩み、ストレスも共有しており、そうした心の内を気兼ねなく打ち明けられる仲間の存在を必要としている人が多いというということが、これまでの活動の中で判ってきた。そこで、今後作り手である母親達が気軽に集まれる空間（集会場）を創出することは、母親達の精神的な開放につながるほか、共通の悩みや問題点を客観的に認識し、また、身近な課題や困難を協力して解決しようという前向きなエネルギーが発生することも期待される。</p> <p>また、ミサंगाの作り手の中には震災によって職を失った方も多く、ミサंगाの</p>

	<p>販売による収入が家計の貴重な足しとなっている。今までミサンガの販売を聖敬会が一括して行ってきたが、作り手達が社会で自立していく力を養うためには、今後は自分たちでも販売方法を工夫する努力が求められる。そこで、自分の作ったミサンガの販売に関わる機会を持つことで、売れるミサンガ、売れないミサンガの違いを知り、どうしたら売れるようになるのか創意工夫意欲を掻き立てることが出来る。また、作り手同士の交流の場を利用して、他者との比較や情報交換など刺激を受けることも向上心につながると考える。今後、復興に向かう取組みの中で必要とされる、積極的な自己アピールや創意工夫、情報収集などの能力を身に着けるために、ミサンガの制作と販売は将来就職に向けた貴重な経験の場といえる。</p>
事業内容	<p>コンポーネント① ミサンガプロジェクトによる仮設住宅の見廻り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフがミサンガ（商品）回収を通して、週1回作り手宅を訪問する（前事業からの引き続き）。その際、孤立化の問題がないと思われる作り手にはコンポーネント②であげるミサンガ作り手の集会場を紹介し、今後は集会場にてミサンガ（商品）を提出してもらうよう促す。 ・引き続き個別訪問の必要が認められる作り手に対しては、訪問の際に現状の問題点や悩みを聞き取り、解決につながる情報を提供するなどして、いち早い立ち上がりの支援をする。 ・一方で専門的な措置が必要と見られるケースの場合には、連携先の市のサポートセンターや他の支援団体などに連絡することによって、早急な対応を取れるよう協力する。
	<p>コンポーネント② ミサンガ作りによるコミュニティ形成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聖敬会の事務所に作り手が集まれるスペースを作り、テーブル、いす、プリンター、PC（外部より提供の見込み）などを備え、各種講習が行える環境を整える。 ・集会場では <ul style="list-style-type: none"> －ミサンガ作り新規説明会 2回/週 －ミサンガ作り方講習会 3回/週 <p>など定期的なミサンガ関連イベントを開催する。また、ミサンガの回収も集会場で行うことにより、ミサンガの作り手が気軽に立ち寄れる機会を提供する。</p>
	<p>コンポーネント③ 作り手の販売体験と創意工夫の促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミサンガの作り手に復興商店街や復興イベントでミサンガ販売に立ち会う体験をしてもらう。 ・②で検討している作り方講習会において、作り手に講師なってもらい、作り手同士で情報共有や刺激を高め合う機会をつくる ・作り手から商品として提出されたミサンガを事務所兼集会場に並べ、展示できる場をつくる

2. 事業の評価（評価者： 寺垣ゆりや / (株) アンジェロセック コンサルタント)

最終評価実施日：2012年6月23日（土）

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングは

よかったか

- 継続事業として震災直後から引き続き取り組まれており、事業実施者、作り手夫々の創意工夫が様々な側面で見受けられ、継続することの効果が現れている。
- 仮設住宅における生活が長くなるにつれ、将来に対する不安やストレスが増加する可能性が高まる時期に、継続的に仕事やコミュニケーションの機会を提供することの効果は大きいと評価出来る。

(b) 有効性：目的の達成率

- 見廻りによりおよそ40名の方の対応、61回のコミュニティ形成を目的とした講習会等を開催、7回の創意工夫促進サロンを開催（参加者数のべ107名）。ミサンガ作り手の登録者数は80名超となった。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

- 戸別訪問を続け、必要な場合には専門家に引き継ぐという対応をとることで、訪問を必要とする方の人数が三分の一程度まで減少した。
- 講習会を多数開催しミサンガの作り手の人数が増えたこと、また継続的に製作している作り手の製作スピードがあがったこと等により、商品数が増え、またその結果として販売ルートを拡販することに繋がり、一ヶ月に1500個～2000個のミサンガが販売された。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

- 市の保健師、養護施設、障害者就労施設、サポートセンターなど、幅広い協力体制を構築しているほか、ミサンガ販売においても国内外から数多くの協力を得ているなど、様々な形での連携が事業に活かされていると評価出来る。

- ミサंगाプロジェクトの今後の取り組み方針について、作り手を含む関係者と情報共有をすることが肝要であると思われる。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

- ミサंगाの袋詰め作業を障害者支援団体に委託しており、間接的に障害者の方々の社会参加や団体の収入向上に貢献している。
- 空港、駅、サービスエリア、パチンコ店等を始めとして、ミサंगा販売ルートが広範かつバラエティに富む形で広がっており、結果として作り手の収入維持あるいは増加の大きな支えとなっている。
- 他県の高校生がミサंगा作り方講習会に参加し、作り手の方々とコミュニケーションをとりながら、自らもミサंगा製作を楽しみ、また文化祭で販売する為に大量のミサंगाを購入するなど、売上げの上での貢献のみならず、講習会参加者にとっての新鮮な刺激となるなど、小さな取り組みではあるが、前向きな効果を生み出す取り組みを実施している。
- 法人格取得、ミサंगाプロジェクトの今後の方向性など、組織としての方針を明確にすることで、プロジェクトに関与している人々が、将来に向けた見通しや計画をたてる手助けになることから、運営担当者間の意思統一を早急に図ることが望ましいと考える。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- 商品と一緒に作り手のストーリーと葉書が入れられており、購入者がその葉書を活用して作り手にメッセージを送ることが出来るようになっている。このアイデアは、前期事業より取り入れられているが、ストーリーは適宜更新され、製作、販売、収入確保、という流れに、実際に作り手の方々が気づ知らずの購入者からの手紙を受け取ることが、外部との繋がりを感じるきっかけとなったり、遠く離れたところから励ましの言葉や製品に対する感想が、更なる製作意欲をかきたてるきっかけとなるという2次的な効果を生み出しており、当該事業のユニークかつ魅力的な取り組みであると評価できる。

3. 評価者の所感

- 講習会を視察させて頂く機会があり、集まった作り手の方々がデザインや作り方に関する意見交換のみならず、家族の話題や購入者から送られてきた葉書の内容などで盛り上がりながら和気あいあいとミサंगा作りを楽しんでいる姿を見せて頂きました。本事業による効果を実感するとともに、いつまで、どのような形でこの事業に参加することが出来るのか、あるいは、作り手の方々自身がどういう意識を持って、今後取り組んで行くべきなのかを早めに理解してもらえるようにする必要があると感じました。